

## モントリオールでの生活を大満喫! 今春、やる気応援奨学金で短期留学

この春、一人きりの海外生活を初体験し、留学先のカナダ第2の都市、モントリオールでこの原稿を書いている。やる気応援奨学金を得ることができ、モントリオールに短期留学する機会を得たのだ。いま、モントリオールでの生活を大・大・大満喫している。

毎日通う語学学校は、決めるまで吟味して調べたかきもあり、授業は厳しいが、先生も生徒もすごくフレンドリーでアットホームな環境である。アクティビティも充実している。

英語で上手く会話ができなくても、私の話しに親身になって耳を傾けてくれる、友達や先生。いつも「Good morning! How are you?」で会話が始まる生活に、毎朝、早く語学学校に行きたくなって心が踊る。

でも、はじめは、ちよっぴりカルチャーショック?を感じたこともあった。授業が始まる15分前に教室に到着したら、先生の他に誰もいな

い。私一人だけ。5分前になっても生徒は全く来る気配がない。そして授業が始まり、少ししてからみんなが登校するという毎日だ。はじめはすごく驚いた。日本では考えられないからだ。

また、授業中は普通にお手洗いなどで、退出してもいいようだ。日本では、少し気負ってなかなか教室の外には出られないが、カナダでは、みんな堂々?と退出して行き、時にはスターバックスのコーヒーを片手に戻ってくる生徒もいる。どうやら、これが、当たり前前の風景のようだ。

それが今では、モントリオールの生活にも慣れてきた。私の拙い英語に耳を傾け、適切な文法に直して教えてくれる、本当に優しいホストマザー。料理がとつても上手で、本当にこの家が一番安心する。

モントリオールで出会ったホストマザー、友達、先生。この出会いを大切にしたい。そして、ここまで来ることができた道のりを支えてくれ

た中大の先生や、やる気応援奨学金の仲間たち、そして家族に感謝している。

みんな、本当に「Merci」。

(M・P)

## 五感で受け止める楽しさの「旅」 最後の長期休みを海外で謳歌

飛び回る日々を送っている。その「旅行ラッシュ」である。帰国してからまたすぐに、次の旅行の荷物を詰め直し始める。所謂、青春期の「最後の長期休み」を謳歌すべく、旅に続けた。

小学生時代から憧れていた国、イタリア。2月のちょうど寒い時期に、卒業旅行第1弾として友人と参加。イタリアへ卒業旅行で行くのが流行っているのか、やたら日本人学生のツアーを見かけた。

現地へ行かなければ分からないこと、見れないこと、聞けないこと、知り得ないこと、体験出来ないこと、疑問にすら思わないこと、考えたりもしなかったこと、会えやしない人、話せやしない人…そういうものが、旅行先には数多く存在していた。

普段、インターネットに頼り切っ

ていると、イタリアという国を手取り早く知ろうと思ったときも、参考になりそうなウェブを一瞬で探し、ざっと流し読みする。そうやって、大よそを、かいつまんで知った気になってしまふ。まったくもって、そんなことないというのに…。そこから新たに考えることは出て来ない。不思議だな、と思うこともない。単なる納得のみだ。

それに対して、五感で物事を受け止めることの楽しさというのは際限がない。興味・関心が果てしなく広がっていく。それも、思いがけない方向に、だ。それを悟ってからというものの、旅行熱が高まっていった。異なる言語・文化を持つ人々とのコミュニケーションを取れるのも、旅の醍醐味である。たとえ普段どれほど勉強していたとしても、いざ、そういう状況になってみないと、蓄

積したものをアウトプット出来ない。海外では、ここぞとばかり挑戦した。なかなか伝わらなくてもどかしくても、向こうの人たちははっきり聞いてくれる。待つてくれる。伝えよう

## 浅草や上野の寄席に行ってみたり… お笑い好きの若い人が目につく寄席

とする姿勢が大事なのだ。世界には知らないものがあり過ぎるから、出来るだけ多くのものを見て、何かを感じたいと願っている。  
(桃)

先日、テレビの人気番組『笑点』

でお馴染みの三遊亭楽太郎師匠と林家たい平師匠の落語を聞きに行った。落語が好きで、毎日でも寄席へ行きたいのだが、授業が終わってから浅草や上野へ行くのはなかなか難しい。こんな時、大学が都心にあったら、「今日は授業サボって寄席に行こう」なんて考えるのかな、とたまに想像する。

その日の客席には、お年寄りから小さい子供まで、多くの人が来ており座席は満席。「こんな小さい頃から寄席に連れてきてもらえるなんて羨ましいな」と少し嫉妬した。テレビドラマなどの影響で落語ブームのためか、若い人も目につく。

演目は、三遊亭楽太郎師匠が『猫の皿』。CDで聞いたことはあったが、

ナマで聞くのは初めてだった。まくらでは、桂歌丸師匠が入院したこともあり「歌丸さんがいなくなったら笑点の次の司会が私がもらいます」といつもの毒舌で客の笑いを誘う。林家たい平師匠は「お見立て」。まくらからオチまで笑いつばなした。た。

中央大学の卒業生では、柳家小団治師匠や三遊亭竜楽師匠、2代目三平を襲名することになった林家いつ平師匠が落語会で活躍しておられる。

「落語なんて年寄りが聞くもんでしょ」なんて思っている人は大間違い。お笑い好きな人なら絶対に好きになるはずだ。せっかく東京にいるのだから、一度は寄席へ行ってみるのもいいのではないだろうか。(上)

# 学生記者になりませんか



「Hakumon ちゅうおう」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、多摩と後楽園キャンパスそれぞれで新入生および新2年生の学生記者を募集しています。

- 元新聞社論説委員のプロや先輩の学生記者に取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です！
- 取材を通して、さまざまな人に会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

申し込み・問い合わせは  
中央大学入学企画課『Hakumonちゅうおう』編集室  
編集担当：伊藤博まで  
Phone：042-674-2146 (直通)  
E-mail：hiroito@tamajs.chuou.ac.jp